



Title	「会社員小説」(論)との接続:伊井直行「雷山からの下山」における試み
Author(s)	川崎, 俊
Citation	国語国文研究, 148, 44-59
Issue Date	2016-03-07
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/89219
Type	article
File Information	Kokugokokubunkenkyu_148_44-59.pdf



[Instructions for use](#)

「会社員小説」(論) との接続

——伊井直行「雷山からの下山」における試み——

川 崎 俊

はじめに

伊井直行の小説における、ありきたりや中途半端とされるものを、言葉を介して徹底的につかもうとすること⁽¹⁾、あるいは、自明とされるものをなぞりながら、その特異性を明るみに出そうとする一貫した試みは、しばしば物語の定型を利用し、また紋切り型の表現に寄り添いながらも、最終的にはそれらを変容させていく。それはグリム童話の「蛙の王子」を換骨奪胎し、高校生でも大学生でもない、浪人生の「ぼく」の一人称で書かれたデビュー作「草のかんむり」⁽²⁾、「群像」一九八三・六⁽³⁾が、自分が書くものや語るものが、「ありふれたストーリー」になることを徹頭徹尾めぐっていることからすでに端的に示されている特徴だが、伊井が自身の経験を基にしなから、従来平均的な日本人像を指すとされてきた、サラリーマンという言葉葉を退けて、ほぼ思考の対象とされることのなかつた、「会社―会社

員」と小説との関係に着目し続けていることも、それと密接に関わっている。

伊井の小説は従来、「幻想小説」というタームで括られることや、村上春樹を論じる際に比較対象として挙げられることが多かったが⁽⁴⁾、近年では伊井自身が、会社員と小説との関わりをめぐる論考を発表し、サブジャンルとしての「会社員小説」を論じながら、同時に自身の小説をそこへ位置づけている。伊井は一九八九年から一九九一年にかけて、「さして重要でない一日」(『群像』一九八九・四)「星の見えない夜」(『群像』一九九一・二)という、独自の男性会社員を主要な登場人物とした二つの「会社員小説」を書いたが、丁度それらの間に、中編小説「雷山からの下山」⁽⁵⁾(『新潮』一九九〇・五、第五回三島由紀夫賞候補作)を発表している。

この小説は、鉄道敷設に伴う土地開発に伴い、「雷山」から「見晴しが丘」へと改称された東京近辺の新興住宅地に建つアパート・ヘリパティ見晴しが丘」をめぐる展開する。ある年の十一月三十日か

ら十二月一日を中心に、登場人物の回想を挿入しながら、ヘリバティ見晴しが丘の「大家」でありながら、同時に自動車会社に勤務する丸山昭さんとその妻子、そして、商社を辞めて出版業界への就職活動と新居探しをする「店子」の松本秋彦君、という二つの家族の生活を並行して記述する。三浦雅士が「創作合評」『群像』一九九〇・六)において指摘したように、平日の朝、家族で久々に雷山へ富士山を見に行った丸山さん一家と、大学時代のサークルの先輩の細田千加さんの家から帰宅途中の松本君とがすれ違う場面は、土地を「持つ者」である丸山さんと「持たざる者」である松本君という「全く違う視点が遭遇するおもしろさ」(三浦)を生む、一応のクライマックスとして考えられる。

発表当時、「平板で退屈」(石原慎太郎)「読後に何の印象も残さない凡作」(江藤淳)とされ、「私たちの日常のようにつべりとして、[...]」(川村湊)等とも評された「雷山からの下山」では、確かに何らかの犯罪も起きず、些細な問題に対する明確な解決が示されるわけでもない。

だが、「新人作家三三人の現在」(『文學界』一九九〇・五)におけるインタビューを参照すると、伊井が自らの方法について、蓮實重彦の名前に触れつつ、「事件」のない小説を書くこととするというのは、現代のある種の傾向とシンクロしているわけですね。その一方で、やはり言いたいことか現代との葛藤があつて書こうとしている人がいるわけでしょう。自分にはそれがなくて、ただただ時代に惑わされるような感じで、自己嫌悪を覚えます。「言葉なんておかしなものを材料にしているぶん、不自由だけど可能性が大きい

だと思えます」と述べているように、同時代評で指摘された要素は、作者によって意図的に導入されたものだ。そこで欠点として捉えられていたものを何らかの試みとして再検討する必要がある。

そのための手がかりを次に示す。「雷山からの下山」は、加藤弘一によるインタビューの中で、伊井自身が前述の「会社員小説」との関連を示唆している。

伊井 これは話すとき長くなるんですが、ぼくは企業の中の人間を書いた小説というのは、たぶん、ありえないだろうと思つて書いているんですね。会社員というものは、小説が書けない最たるものだと思います。よくわからないでしょ？

—— わからないですね。

伊井 会社員というような十全な登場人物になりえないものは、小説にはできないんです。まだ、抽象的ですか？

—— 『雷山からの下山』は大家と店子の話ですが、二人ともサラリーマンではないですか？ 店子の方は途中でフリーターになつてしましますが。

伊井 あの主人公たちは、実は、一度も会社に行っていないんです。

—— えっ!?

伊井 会話の中などで会社の話は出てきますが、小説の中に流れている時間では、一度も会社の場面は登場しないんです。これは意図的でしょね、「さして重要でない一日」の方では、一度も会社の外へ出ないんですよ。

「：」

——『雷山からの下山』という作品はフリーターの世態人情を滑稽化していると同時に、サラリーマン的な世態人情も滑稽化していると思います。あれは立派なサラリーマン小説じゃないかと思うのですが。

伊井 あの家は、会社の中では「窓際族」ですから、一種のドロップアウトともいえるんです。もし、バリバリに働いていましてという人があそこに出てきたと考えますとね、小説として成り立たないんですよ。⁽⁷⁾

本稿では、当時から会社員を書くことを小説のアポリアと位置づけていた伊井が、会社の場面を「意図的」に書かなかった「雷山からの下山」と、後年の「会社員小説」論の諸問題、すなわち作品と方法論とのそれぞれの特徴を摘出して結びつけることを目的とする。前提を確認するための第一～三節にかけては、伊井自身の言葉の引用が多くなり、分析においてもそれらの言い替えに留まらざるを得なかった部分がある。しかし、彼の方法論を一度整理し、小説との関連を見ていくことで、はじめて、異なる視座に立脚した分析のための土台が整備され得るだろう。第四～五節の立論はそれにより可能となっている。

一・「会社—会社員」の特異性をめぐって

本節と次節では『会社員とは何者か?』——会社員小説をめぐって

て』（講談社・二〇一二、以下『会社員とは何者か?』と表記、頁数があるものは特記しない限り『会社員とは何者か?』からの引用）の論点を中心に、「会社員小説」論の内容を確認する（本節以降、「会社—会社員」と鉤括弧で表記する場合、伊井の論によるものを意味する）。

「雷山からの下山」を含む一連の「会社員小説」とほぼ同時期に書かれた、「サラリーマンとは誰のことか」（『群像』一九九一・五）という文章が、おそらく伊井の「会社員小説」論の起点だが、ここでは、サラリーマンという和製英語が、あたかも日本の平均的労働者を意味するように使用されていながらも、それが実体とかけ離れていること、そして、大正期からすでにホワイトカラー（頭脳労働者）とサラリーマン（俸給労働者）という、職種と勤労形態という二つの異なるカテゴリーの混同が生じていたことが、統計資料等を引きつつ説明されている。

この発想は、大学卒業時の就職難に加え、群像新人文学賞受賞の年（一九八三年）に出版社を辞めて、所謂「フリーター」生活しばらく送っていたという伊井自身の経験に基づく部分⁽⁸⁾が大きい。この時期に会社員生活を捉え直す機会があったはずだ。ただ、本人の述懐によれば、当時は「フリーター」という言葉はなかった。実際、「フリーアルバイター（フリーター）」という言葉が、所謂正社員に対して肯定的なものとして登場したのは一九八五年頃で、一九八七年にはリクルート社のアルバイト情報誌『フロム・エー』で、「既成概念を打ち破る新自由人種」などと表現されている⁽⁹⁾。このような言説は、ほぼ同時期に、浅田彰『逃走論——スキゾ・キッズの冒険』

〔筑摩書房・一九八四〕で、会社員を指す「セビロ」〔パラーノ人間〕に対し、コピーライター等の「スキゾ人間」が肯定的に語られていたことや、戸部良一他『失敗の本質——日本軍の組織論的研究』（ダイヤモンド社・一九八四）が、日本型組織の批判論として受け止められたこと等と、共通した認識の枠組みを示す。すなわち、伊井の『会社員小説』（論）の出發は、新自由主義的な政策を行っていた中曾根康弘内閣（一九八二〜八七年）の時代に生じた、労働者派遣事業法および男女雇用機会均等法の成立（一九八五年）に象徴される、年功序列制や終身雇用制という特徴を持つ、日本型の企業社会や労働形態に対する認識の変動と期を一にしている。

このように労働形態が多様化しつつあった状況であれば尚更、平均的な日本人像を指すとされる、サラリーマンという曖昧な言葉では、近代以降の労働者の特徴をとらえることはできない。そのため伊井は「会社—会社員」の問題を検討することになる。伊井の「会社—会社員」は、一般的に想定されるものとは微妙に異なる定義がなされている。伊井は『岩崎彌太郎——「会社」の創造』（講談社新書・二〇一〇）と『会社員とは何者か？』の二つの著作において、選り縁による共同体としての「会社」を、岩崎の日記や、彼が創始した日本郵船（現在の三菱）に関わる資料を調査し、「自らの意思で集まった成員による営利を目的とする組織」（二二七頁）とする。

伊井曰く、近代（＝日本における資本主義社会の誕生）以前／以後の切断を、その日本的組織としての「会社」の誕生、すなわち江戸時代までの封建的な身分制度を解体して生まれた集団に見出すことができるという。従来、岩崎の組織の経営方法は、同時代の渋沢

栄一による株式会社仕組みとは対照的に、「独裁」的な体制と見なされてきた。その二つの特徴は、最終的に岩崎の日本郵船（現在の三菱）において統合されるが、伊井は岩崎が生み出した体制の持つ特徴に着目する。明治維新と廃藩置県によって、旧国境を基準とした豪商中心の古い商業空間は均一なものへと生まれ変わった。そこでは情報伝達や輸送手段の速度の優位性が組織の成功を左右する。つまり、情報の分析および差異＝価値を創出できる高度な教育を受けた人材によって成る組織と、それを束ねる有能な経営者が必要となったため、岩崎は「独裁」と呼ばれる仕組みを整備した、という。

ここでは、「会社」という言葉に本来営利のニュアンスが含まれていなかったことも指摘されている。「会社」では利益の追求のみならず、組織への参加にあたって個人の自発的な意思も尊重される。「日本近代の始まりにおいて、「会社」という自発的な人々の集合・共同は、まず利益の追求のための組織として顕著な形で現れたのである」（二二七頁）。そして何より、岩崎が公用と私用の二種類の日記をつけていたように、三菱の創設は、公的領域と私的領域を作り出す新たな共同体の誕生だった。

このような「会社」の特徴は、その構成員である「会社員」の性質と強く結びつく。

伊井は、サラリーマンと異なる、「会社員」の特異性を、自身の経験に基にして以下のように説明する。

私が会社に勤めていた時の経験を思い出していたきたい。まず、三十八度の熱を出して勤務中に居眠りをし、課長に頭をは

たかれた時のこと。頭に触れた課長の手の感触が違和感と共に長く残った、と私は記した。この強い違和感は、会社員における公私の分離が身体的な感覚として（少なくとも私の身体に）刻み込まれていたことを示している。会社員は小さな法人として会社にいるわけだが、その身体は、自然人としての生身の身体と同じものである。あのとき、法人としての鋼の鎧に覆われた課長の手が、眠ることで自然人に選んでいた私の身体を「侵犯」したのである（二一七頁）。

「会社」は「法人」（＝人格を持った企業と呼ばれるように、「モノ」なのにヒト）（二二二頁）という奇妙な特徴を持つが、そこに所属する正社員は、ここでは制服という「鋼の鎧」あるいは「モビルスーツ」（テレビアニメ「機動戦士ガンダム」の兵器）を着た「ロボット人間」だ（伊井は別の箇所、非正規労働者は「人間」として「ロボット人間」が集まる会社に入り込むが、その「ロボット人間」もまた人間なのだ、と付け加えている）。この喩えからは、「ロボット」＝人間の機械化、という問題に加えて、一つの体に走る公私の分断線、あるいはその二重性への着目を読み取るべきだろう。ここでは、「モノなのにヒト」である「会社」への所属によって個人が主体化される様態が浮き彫りにされることで、その成員である「会社員」が、職業や仕事を意味するものではなく、また、ホワイトカラーや正規雇用者等のカテゴリとも異なるものとして見出される。つまり、伊井の「会社員」とは、公私の分裂という特徴を持つ、職種や雇用形態にかかわらず、「会社」に所属する労働者のことであり、それを自

明のものとする思考の枠組み自体が問題視されている。

二・「会社員」と小説のリミット

文学において、社会と個人との関係を書こうとするならば、「公私の分断」がひとつの体に共存する特徴を持つ「会社員」は主要な題材たり得るはずだ。伊井の「会社—会社員」に関する二つの著作は、まさにその存在論的な問題に着目したものである。しかし、日本において、「会社—会社員」と同時期に誕生した小説は、それを書くことができなかった、と伊井は述べる。前掲の加藤によるインタビューにおける、別の箇所を確認しよう。

伊井 「…」小説には書きうる限界がある、という話です。それも、近代の代表的な文学形式である小説が、もつとも近代的な存在である「会社員」を描くことができないという大いなる不自由についての話です。眼の前に大洋が広がっているのに、そこでは泳ぐことも、水を飲むこともできない、そんな不自由が小説にはあるのです。

べつの言い方をすると、小説は小説に書ける題材を相手にするものだという当り前のことですね。会社員というのは上半身が会社にとけこんでしまっていて、全体像を書こうとすると、会社の仕事そのものを書かなければならないんです。そんなものは読んでおもしろいわけがない。無理におもしろくしようとすると、日経のビジネス小説になります。そういうことが経験

的にわかったんです。まことに残念ながら。

加えて、「小説が書いてきたのは、犯罪者とか、社会的に許されない恋愛をした人とか、劇的な生涯をおくった人とか、そういう人ばかり」（加藤によるインタビューより）という言葉から読み取れるように、伊井の問題意識は、日本社会において増大し続ける、「会社員」という「上半身が会社にとけこんで」いる個人の存在の様態を書く小説の方法が、いまだに考えられてすらいないことに対して向いている。

それに関連して、後年伊井は「文学には元々、中間が抜け落ちているのである」（一四九頁）と書いているが、この文章が意味するところは、以下の雑誌掲載時（会社員小説をめぐって（第八回））『群像』二〇一一・二）の表現の方が解りやすい。

今次の芥川賞について、報道にあつたらしい「美女と野獣」という言葉を引きながら、両極端を呑み込んでしまう文学の懐の深さと書いた経済関係のコラムがあつたが、文学とは元々そうしたものである。代わりに、中間が抜け落ちてゐる。

ここまで確認してきた一連の文章では、「文学」になりやすい「両極端」なものあいだを捉えることそれ自体の困難さが示されているが、そのような試みを検討するためのサブジャンル、「会社員小説」は、以下のように定義される。

少し遠回りをしたが、会社員小説の定義が手に入ったようだ。それは、単に会社を舞台とし、会社員が主要な人物として登場する小説ではなく、主要な登場人物として会社員の存在が不可欠の小説である。つまり、作品の舞台となるのは主に会社であるものの、仕事の内容は必須の要素ではない。純文学やエンタテイメントといったジャンルの別を問題としないが、登場人物の会社員は、単なる情報提供者やストーリーへの奉仕者であってはならない。（九一頁）

ここに引用した箇所は、「会社員小説」論が、先行する源氏鶏太等の「サラリーマン小説」や、「キャラクター小説」に対する異議となつてゐることを端的に示す。例えば、同書で池井戸潤の連作短編小説「シャイロックの子供たち」が取り上げられてゐる箇所にて確認しよう。ホワイトカラーが登場し、仕事の内容が書かれてゐる小説であつたとしても、「幼子の手を、今さらもみじと形容する」（六四頁）比喩のような「紋切り型」＝「効率のいい記述」（六四頁）がなされてゐるものならば、伊井の示した「会社員小説」のコードで読む必然性はない。また、容易に物語の定型を当てはめて構造化できるものであつても、「会社員」という個人の特異性を捉えるものたりえない、ということになる。

また、「仕事の内容は必須の要素ではない」と書かれてゐることから、伊井が問題としてゐるのは、小説における労働の表現でもないことは明らかだ。「法人」という「モノなのにヒト」の中に個人が取りこまれてゐる事態を題材とした小説が、「会社員小説」なのである。

「会社員」を書くことは長らく小説のリミットとなつていたが、主に第二次世界大戦後の日本で、その押し広げとなり得るものが登場したことを、伊井は重視しているように思える。例えば当時の会社員を「一切の意味づけが不可能な存在」（二四三頁）として書いていた庄野潤三「ブルーサイド小景」をはじめ、オフィスの労働と私生活との関係を捉え直すため「安易な物語化は避けられ、必要とあれば晦渋になる」（二四三頁）黒井千次、会社と家庭との半身ずつの状態の人物を書くべく「一見下手くそと見える文章」（二六五頁）を意識的に導入した坂上弘の小説に着目し、併せて、外国語で書かれた小説では、カフカ「変身」とメルヴィル「バートルビー」の登場人物を、「会社と家庭で失われている半身を回復したために怪物と化した」（二〇七頁）表現として読んでゐる。

分析の対象となる小説で一番古い「バートルビー」（一八五三年）と、最新の部類に入る津村記久子「アレグリアとは仕事はできない」（二〇〇八年）が共に、壊れたコピー機（＝書写人）と、それに関わることで苦しむ人々を描いている、ということにも（伊井の「さして重要でない一日」でコピー機の不調が重要な要素となつてゐることと併せて）、注目すべきだろう。故障し、死に至るコピー機は、私生活を切り離れた「会社」＝「ゲームの空間」（一八七頁）における、普段は意識されない「会社員」の生の様態を考えるためのヒントとなり得る。これらの小説において、「会社員」が会社を辞めることや、生産のラインから外れることが、あたかも死ぬことのように書かれるのは、「モノなのにヒト」として活動する「会社」に、個人の半身が取り込まれているからだ。

さしあたり以下のようにまとめておこう。「会社員小説」（論）は、自明のものとされてきたために、従来思考の対象とされなかった「会社員」としての個人を可視化すること、そして、従来小説の「表現」に関わるとされてきた要素を取り除いて、それでも書くための方法の探究、という小説の限界と背中合わせになる試みだ。伊井がバートルビーを故障したコピー機そのものとして捉え、書けなくなつた作家の比喩とする読み方をやんわりと否定していること、そして「表現」する者にまつわるストーリーは文学の本流に含まれる。広告や放送、新聞や出版関係の会社員を主要な登場人物とする小説は、会社員小説に入れない方がよい」（三三四頁）という箇所を示されているように、それは、小説についての小説（メタフィクション）への興味とは極めて遠いところにある。加えて、伊井が「一九七三年のピンボール」を例に指摘するように、しばしば伊井の比較対象とされる村上春樹の小説が、会社で働くことの記述をテクニカルに避けていること（五五―五六頁）、そして、村上のデビュー作「風の歌を聴け」では、すでに書く行為そのものについて強く意識されていることを踏まえると、伊井と村上との違いは極めて明確なものとなる。

三・文体と名前

本節では、「雷山からの下山」の文体、および名前に関わるいくつかの問題と、「会社員小説」（論）との重なり、すなわち、小説と方法論との対応関係の確認を行う。

文体の特徴から見ていこう。以下の引用では、括弧の挿入や、同

じ語句（税金対策）が繰り返され、一文の情報量が多くなり、引用部分を含め多くの箇所では比喩表現も抑さえられているが、登場人物が迷宮化した会社を彷徨う「さして重要でない一日」でも類似点を確認できる。比喩という、対象を異なるイメージとつなげる方法の抑制は、「会社員」そのものを取り出そうとする試みと繋がることは明白だ。雷山からの下山の特徴として指摘された「平板」さや「のつべり」とした感覚は、これらの効果によるものであり、同時に、雷山付近の地誌や、室内の構造を示しながらも、同時にそれらにおける細部の要素の結びつきを妙に捉えにくいものとしている⁽¹⁰⁾。また、内容においても、タイミングのずれや効率の悪さ、ちぐはぐさや接触事故のモチーフ（「不連の循環」）が繰り返し示される。

へりバティ見晴しが丘〕は一見コンクリートに見えるが、実際には鉄骨モルタルづくりの二階建てアパートである。モダンな印象の明るいベージュ色の建物は、左右対称に二つの階段が配され、2DKの同じ間取りの部屋が八戸入っている。道路を挟んだ向いは砂利敷きの駐車場だが、近所は庭付き一戸建ての住宅が主で、背後は税金対策に梅の木を植えた雑壇の「農地」となっており（税金対策であっても、冬の終わりには赤や白のきれいな花が咲く）、周囲の緑にも恵まれている。環境の良い静かな場所に住みたい人には、駅から遠い山の上であることさえ気にしなければ、格好の物件と思えるかもしれない。家賃は、広さにすれば高くはないが、立地からすると安いともいえない。

（本文一〇四頁）

登場人物の特徴も、「雷山からの下山」ではより捉えにくいものになっている。たとえば、「新自由人種」である「フリーター」に徹することができず就職活動を続ける松本君と、会社では「部」のメカニズムの内部からおおむね排除され（本文八四頁）、全部自分で見つけたり創り出したりした（「同」仕事をし、同時にアパートを経営する個人事業主である昭さんは、どちらも会社員としてはあまりにも中途半端な存在だ。二人の中途半端さは、「会社」という共同体から外れつつも、同時にそこに執着せざるを得ないという点にあり、フリーのコンピューター・プログラマーという触れ込みの「二〇四号室の宮本さん」のように自身が企業体として活動する個人や、松本君の大学時代のサークルの先輩で、アパートの部屋に「マリ・クレール」らしき女性誌の置いてある出版社勤務の細田さんと、彼女の同居人で、現在はマスコミ関係の仕事をしている潮野さんのような、会社の枠組みにとらわれず所謂クリエイティブな仕事をする、当時の「ギョーカイ人」（真実一郎⁽¹¹⁾）とは明らかに異なっている。たまたま仕事と学校のない平日の午前、という、あからさまに中途半端なものとしてしつらえられた時間の区切りにおいて、松本君と昭さんの二人は、すれ違いながらも、同時に重ねられている。

次に名前の問題について。複数の呼称の共存という特徴および名前を巡る諸問題は、伊井の書いたもの（小説内のモチーフのみならず、「サラリーマン」という名付けへの懐疑などを含めたもの）において広く確認できる⁽¹²⁾。年号が昭和から平成へと変わった後に発表さ

れた「雷山からの下山」でも、「雷山」が「見晴しが丘」となり、その頂にあるへのぞき岩も「見晴し岩」に改名された、というエピソードがあるように、名付けと土地の変容との関連、一步押し進めた見方をするなら、「雷山からの下山」のテクストには、言葉と対象との複雑な関係について、寓意的な表現が織り込まれている。

この問題をもう少し限定してみよう。「会社員小説」(論)ではとりわけ、会社における階層性と呼称との関連が強く意識されている。例えば、『会社員とは何者か?』では、会社の同期、という人間関係の特殊性を取り出す為に、登場人物を姓のみで示した糸山秋子「沖で待つ」の分析において、日本語に存在する年齢の変化と関わる表現の規則が指摘されているが、一連の「会社員小説」では、それに先がけて工夫がなされていた。例えば「さして重要でない一日」の主な視点人物は、「彼」＝「佐藤道郎」と、男性を指す代名詞と固有名とに二重化され、さらに登場人物の呼称が雇用形態によって書き分けられている。これは、会社内／外の様々な階層性、例えば源氏の「サラリーマン小説」等では暗黙裡の前提とされている仕組み(男性中心主義的な会社の組織や、会社内の上下関係と名前への「さん」付け・「君」付けとの関連など)を明るみに出す。

伊井自身が「長く生きれば、周囲から、たとえ尊敬されなくても、少なくとも丁寧語で話しかけられるようになる」というのは、社会のありようとしてまともだ(『会社員とは何者か?』一九二頁)と、年齢による呼称の変化は「平等の精神」に適ったものだ、と書いたように、「雷山からの下山」における登場人物の呼称は、高校生以上の年齢はすべて名前に「さん」または「君」付けとなり、同一人物

であつても「丸山さん」「昭さん」「昭君」「昭」のように書き分けられ、会社(あるいは学校)で、家族に限らず何らかの血縁関係に基づくつながりを代理する場合には姓で示される(過去の雷山についての記述は、おそらく呼称の問題を際立たせるために導入されている)。伊井が「会社員小説」の分析に際して引用した坂上弘の言葉を使うなら、「雷山からの下山」の呼称の問題は、「会社員小説」(論)の問題意識の上に、広い意味で「個」と「社会」の二重構造¹⁵⁾を示す方法を採用し、また、個人が複数の異なる集団に属した状態における、主体化の問題を示している。

四・系列の並置、「公私の分断」の潜在

「会社員小説」論では、「公私の分断」もまた、重要なキーワードとなっていたが、「会社員小説」におけるその実際はどうなっているのだろうか。伊井自身は当時の小説について、「会社と私生活の分離については、まだ私の意識にのぼっていない」(『会社員とは何者か?』一八一頁)としているが、「さして重要でない一日」では、「彼」が、妹の葬儀に出席するための有給休暇を、忌引に振り替えなかった理由について、「会社の人間と妹の死について話したくなかったというだけのこと、ほかには何もなし」とされ、また、「彼」の社外での公私を混同したとある行動を見ていた誰かが女性社員たちにそれを伝えることで、「彼」は彼女たちに嫌われる、とあるように、それに相当する記述は、この時点ですでに確認できる。

「雷山からの下山」においても類似点は見出せる。同時代の「書評

〔「雷山からの下山」〕（無署名、『読売新聞』一九九一・八・一九）では、「新しい個人主義への実験過程」という小見出しの下、「友人」と「他人」と「身内」をはっきりと区別し「ていると指摘があるように、ヘリパティ見晴しが丘の松本君の部屋における電話は、家族と友人とで鉤括弧の有無によって書き分けられ、雷山にあるへのぞき岩の改名にしても、「プライベート」に関する寓意的な読み方を誘うように書かれている。また、金額・日付・時間といった数字による生活のための尺度を「公」とする読み方も可能だろう。

しかし、「雷山からの下山」では、「公私の分断」の問題は、もはや「会社」と私生活との関係にとどまらない。例えば、鉄道建設に関連する一族の問題を父親が昭さんたちに話さなかったこと、長男・悠一の不登校の解決が「見えないところ」で進んだことが、昭さんにとって「薄気味悪く」感じられたことなど（悠一が兄弟の中ではみ出し者になっていることは、昭さんの兄弟関係および会社内でのポジション等とともに系列をなす）を確認すれば、既に指摘した「さして重要でない一日」における「公私の分断」の記述との類似は明らかだ。

そして、「雷山からの下山」では、「会社員小説」論で示されたものとは異なる「公私の分断」の表現が、内容と形式の双方にわたって組み込まれている。

昭さんが眠りから目覚めた場面から考えたい。目覚めは、個人における最も私的な領域としての睡眠からの、意識し得ない移行であり、そこで昭さんは会社の夢を見ていた、という、明確に公私の混在を意図した表現が確認できる。これは意識的に制御できないもの

としての公私の境界の変化と捉えられるが、同じことが「鋭い耳」という言葉で高橋源一郎が指摘した要素にも当てはまる。細野さんの部屋でなぜか物音を立てずに動いている潮野さんや、アパートの部屋からドアを隔てて漏れ聞こえる音なども、境界と領域の受動的・無意識的な発生に関わる表現として考えられる。

これら一連の要素は、小説の形式的な問題とも関係している。以下は、松本君が細野さんの部屋に泊まる場面からの引用である。この箇所をはじめ、松本君の感覚による境界の生成もまた、きわめて受動的な書き方になっているが、それと同時に、「雷山からの下山」における、さまざまなモチーフの系列が、並置されていることに目を向けたい。

松本君がコタツのある和室を出たのと、風呂上がりの潮野さんが廊下に現れたのは殆ど同時だった。潮野さんは素っ裸だった。髪の毛をタオルでごしごし拭きながら歩いて来るので、松本君は、自分が潮野さんからは見えない人物であることにして通り過ぎようとした。視線がどうしても潮野さんの股間に向かつてしまう。同時に松本君の視線はあれは見てはいけないものだというタブーに遮られる——たった今見たばかりの映像が消し去られ、脳内で画像処理を施されてぼやけた記憶だけが残る。

（本文二二〇頁）

ほとんどジョークのような書き方だが、ここでは複数の系列の連絡に着目する。あてにならない不確かな記憶の表現で使用される視覚

的な比喩と、隠す＝塗る（アパートの壁へのペンキによる落書きや、タバコで汚れた壁紙の取り換えなど）のモチーフとのつながりによって、「見てはいけない」ことの線引きが示されている。

前段落の「並置」という言葉は、独立して展開するそれぞれの系列同士に、明確な繋がりや因果関係がないことから使用している。つまり、そのような特徴は、様々な組み合わせと組み換えが可能であることが示唆されている、ということだ。結びつきが生成する兆候は潜在的なものとして、そして、その生成自体は言葉の意味内容と、形式との重なりによって表現されている。引用箇所即して言い替えると、一つの文中で二つの系列が交錯して意味のまとまりが発生すること、「公私の分断」がいついかなるようにも生じうることに対応している、ということである。すなわち、小説の二つの位相において、公的／私的領域のそれぞれをいわば雑種的なものとして示す試みとして捉えられるのだ。

「雷山からの下山」の多様な要素のまとまりのなさに対して、後藤明生は「創作合評」にて、「読者を誘い込む手法として、ばらばらになっちゃっている」ため「手法上の破綻、一種の失敗」と述べていた。しかし、このように後藤が欠点としたものこそ、会社の中に閉じ込められたオンタイムの会社員を書いた「さして重要でない一日」とはちょうど背中合わせになるような方法を使った「雷山からの下山」における重要な特徴であり、「会社員小説」論における「公私の分断」の問題を拡張するものとなる。

例えば、会社を主な舞台とした「さして重要でない一日」や「星の見えない夜」においても、電話や噂、外部と複雑なかたちで繋が

る会社の建物の構造、あるいは、「会社員」が自宅において会社での出来事にとらわれ続ける、といった、公私の境界それ自体が攪乱される記述がいくつも確認できる。無論それらは会社という公的領域と、個人との関係を捉え直すために導入されたものだ。しかし、いくらか飛躍があることを承知で述べるならば、「公私の分断」を捉える手法を徹底化すること、そして、当時の「フリーター」言説に象徴される、仕事と余暇、職場と家庭、といった区分の曖昧化、という問題意識を突き詰めることで、当時まだ意識されていなかった個人の在り方が、この時期の伊井の小説においてすでに書かれていたのだ。例えば、好もうと好むまいと、端末からネットワークに繋がらざるを得ないことで、公私の混在がいついかなる場合においても生じることは、既に今日においては極めて日常的かつ自明のこととして受け取られている。テクノロジーと結びついて生じる公私の混在、そして個人と社会との関わり方の変容の予兆が、「雷山からの下山」や一連の「会社員小説」には書き込まれている、と考えられるのではないか。

五・「郊外文学」から差し戻す

前節では「会社員小説（論）」の詳細と、「雷山からの下山」の記述との関連を確認してきたが、前出の「創作合評」では、富岡多恵子「波うつ土地」が引き合いに出されているように、「郊外文学」のサブジャンルを読解の一つの枠組みとすることも、ごく常軌的であり、かつ有効な手続きであると考えられる。

これは一見すると、本稿の意図するところとは真逆の方法である。郊外が近代以降の職任分離を前提に、再生産活動の場として展開した歴史的事実があるように、「郊外文学」と、ここまで「雷山からの下山」と関連付けて来た「会社員小説」とは、両極端に位置する関係にあると言えるからだ。実際、「雷山からの下山」では、「社員が互いに身分や生計を保証し合う一種の相互扶助組織でもあるのだ」（本文一四七頁）という松本君の言葉によって連想されるような、選択縁による共同体としての「会社」の記述は、「意図的」に避けられている。だが問題は、おそらく、そのような特徴を踏まえて小説のトピクスに郊外が選ばれたこともまた「意図的」だ、ということである。本節では、「郊外文学」のフレームを採用したのちに、「会社員小説」の問題へと差し戻す、という手続きを踏むことになる。

「郊外文学」に関する言説はすでに蓄積がある。ここでは分析の導入として、小田光雄『〈郊外〉の誕生と死』（青弓社・一九九七）における島田雅彦の小説についての論考と関わる点にのみ、ごく簡単に触れておく。というのも、小田は江藤淳や奥野健男の文学論を下敷きに、アメリカニズムの観点から「郊外文学」の系譜を示しているが、伊井と全く同時期にデビューした島田の小説に書かれた郊外生活の特徴を、「パステイ・シユ」や「シミュラクル」という言葉で特徴づけて論じているからだ。

島田の小説と同様に、郊外を舞台とした「雷山からの下山」においても、丸山さん一家や松本君の、郊外における消費生活が書かれている。アパート住まいの松本君が駐車場を解約して車を手放し、引越し時にレンタカーを使う、といった記述などは、小田が島田

の小説に見出したもの、すなわち、自らを構成する全てが借り物であることの、より具体的なレベルにおける表現と読むことができるかもしれない。また、第二次世界大戦が終わった直後、昭さんが幼少期に、父親の転職に伴い一族の住む雷山に戻ってきたところを一応の起点として、鉄工所の設立と消滅などの土地にまつわる挿話が繰り返され、登場人物たちの戦後の学生運動に対する認識の違いなどの記述は、第二次世界大戦後の日本社会の諸相を寓意的に示す。

しかし、これら一連の要素は、島田の小説に見られる類の批評性と比べると、さほど独特なものではないだろう。小田のものを含め、村上春樹・村上龍の所謂「Wムラカミ」登場以降の小説を、ポストコロニアル文学として読み直す論考において、島田の小説が取り上げられる一方、伊井のそれが完全に抜け落ちている理由も、おそらくそこにある。

では、「郊外文学」の枠組を持ち出すことで見えてくる、「雷山からの下山」の独自性とは何か。ここで、松本君と丸山さん、主要登場人物二人の関係性は「大家」と「店子」であること、すなわちアパート・ヘリパティ見晴しが丘の賃貸借契約によって成立している、という点に立ち返ろう。「雷山からの下山」において、共同体とよそ者、という説話的な定型を脱臼した、貨幣と権利書に基づく関係性の象徴としてアパートを捉えることが、それを見出すための手がかりとなる。

具体的な分析の前段階として、第二次世界大戦後の小説におけるアパート表象の文脈を確認しておく。一九七〇年前後に、所謂中間層としてのサラリーマンの、郊外におけるマイホーム生活の理想

を投影する場が、集合住宅から持ち家へと転換した。¹⁹⁾ 伊井に先行する、「内向の世代」とされる古井由吉や後藤明生らの小説にも、しばしばアパートや団地等の集合住宅が登場するが、それらはちょうどこの時期に書かれ、それ以降の小説では、アパートは家族の多様性の表現と関わる舞台装置となる。例えば近藤祐は、家族を持った若い男性が木造の賃貸アパートに《アジール性》を求めて葛藤する、佐藤泰志「美しい夏」（一九八四年）と、そこからバブル経済期を挟んで、ワンルームに住む女性の自閉した状況を書いた笹野頼子「なにもしてない」（一九九〇年）佐藤が自殺した年との表現の断絶を例に、一九八〇年代末における家族性の変質と、表現の変容との関連を示唆している。²⁰⁾

「なにもしてない」と同時期に発表された「雷山からの下山」を、近藤の見取り図に置くと、まず、アパートにおける賃貸借関係、および核家族と単身者双方の生活を書いたその特徴が独自のものと見ていく。そして、開発業者との話し合いの場で、一人の「丸山さん」の発言をきっかけに、「雷山」を巡る地縁・血縁関係もまた、貨幣と権利書によるものへと再編成されているように、雷山の住宅地における人間関係それ自体が、アパートのような様相を呈していることに気付く。

これは、加藤弘一が、これよりもやや後年の伊井の小説である「三月生まれ」（『群像』一九九五・九）について、「町全体が社宅みたいになっている」（前掲のインタビューより）とした指摘と通じる内容だ。

このような「雷山からの下山」の特徴は、九〇年代後半に若林幹

夫が、新たな郊外（あるいは都市的なもの）のあり方として提出した、資本制や交通によって媒介される「巨大な人口群からなる協働連関の全域」、あるいは「人びとの集合体が共に在りながら異和的で在りつづける社会、巨大な人びとの集合体が移動することを通じて共に在る社会」としての、「共異体」⇨「共移体」の概念、すなわち、人々によって生きられている、常に変化を生み出し続ける場、という発想へ接近しているように思える。²¹⁾ ただ、この小説で「会社員小説」と通じる方法が用いられていることを考えると、組織と切り離せない形で存在する個人を、具体的な表現によって取り出そうとする試みのうちに、それと近い要素が認められる、ということだろう。

「雷山からの下山」では、それらが労働の問題へ繋がっている。例えば丸山家について確認すれば、家父長制的な状況が残りつつ、同時に「会社」のようになっていく。昭さんの「命令に服従する妻」である栄子さんが、家事と冷凍食品のセールスの仕事をしながら、同時に「果てることのない厄介事と気苦労を引き受ける代償として家賃をもらっているようなものだ」（本文一五二頁）と、アパート経営に従事する労働者のように書かれている（更に言えば彼女の実家は呉服屋、つまり自営業だ）のは、その一例だ。「会社」と家族関係（あるいは国家体制）の類似、というモチーフ自体は、「パパの伝説」（『群像』一九八四・二）や「悲しみの航海」（『群像』一九八六・七）といった「会社員小説」以前の作品にも見られるが、すでに確認したように、「雷山からの下山」では、呼称の変化や、「公私の分断」の表現が導入されていることから、その問題意識はより先鋭化されている。

そして、栄子さんの家事と子どもたちの登校、あるいは、家庭内における感情のコントロールという、貨幣の流通経路から外れた労働、いわゆる「シャドウ・ワーク」²²⁾が書かれていることも見過ごせない。「会社員小説」に分類される「さして重要でない一日」と「星の見えない夜」でも類似した記述は見られるが、「雷山からの下山」では、「会社」と切り離された場所での生活においても、複数の(再生産に関わるつながりに否応なく取り込まれて生活する人々の様態が前景化されている。「雷山からの下山」は、公と私、会社と家庭、労働と余暇、といったものの区別が明確につかなくなつた社会の表現、としても読むことができる。

おわりに

「会社員小説をめぐって(第十二回)」「群像」二〇一一・六)において、「雷山からの下山」は、(おそらく、「会社」に所属している「会社員」の全体像を書いてはいたないために)「会社員小説」には入らない、とされているが、「会社員小説」(論)の諸問題を導入して分析することで、「雷山からの下山」の独自性と、伊井の方法の一端が明らかになる。

「雷山からの下山」は、「会社」なき郊外において、複数の(再生産関係と、その重なり位置する個人の様態そのものを同時に取り出すために、当時の「会社員小説」と通じる方法を用いた試みだった、と結論付けられる。この小説は、「会社員小説」(論)の問題を押し広げつつ、組織や共同体(会社、行政、家族など)が変化

し、組み替わり続ける状況を、言葉で捉えようとする、伊井の創作活動の一面面を、「会社員小説」との係わりから照射するのである。ここから、「雷山からの下山」とはまた異なる特徴的な文体が用いられた「星の見えない夜」の分析が稿を改めて続くことになる。同時代評では「テレビドラマ的な平明さばかり目立」つ(渡部直己)、とされていたが、²³⁾独自の男性会社員の会社内/外の生活の時間を文章で表現することを試みたこの小説からも、「会社員」と小説を巡る諸問題を取り出し得るだろう。

注

- (1) このような特徴を指摘した文章として、柴田元幸「さして重要でない解説」(伊井直行『さして重要でない一日』講談社文芸文庫・二〇二二所収)等がある。
- (2) 例えば比較的近年のものとして、佐々木敦「リトル・ピープルよりレワニワを」(河出書房新書編集部編『村上春樹』1Q84)をどう読むか』河出書房新社・二〇〇九所収)など。
- (3) 底本は単行本(新潮社・一九九一)を用いた。
- (4) 「第五回三島由紀夫賞発表——受賞作・該当作品なし」(新潮)一九九二・七)参照。
- (5) 『今月の書評』『文學界』一九九〇・一一)参照。
- (6) また、伊井の「二週間でピンチオン世界を四分の三周(トマス・ピンチオン「スロー・ラーナー」)」「早稲田文学」第八次、一九八八・一一)という文章からは、ピンチオンの「競

売ナンバー49の叫び」に言及していた「さて重要でない一日」およびそれ以降の小説が、ピンチョンの翻訳文体の影響を受けていることも推察できる。当時伊井は実験的な文体の短編小説をいくつか書いていた。

(7) 「ほら貝・加藤弘一ウェブサイト」(インタビュ어의日付は一九九六・一・一六) (<http://www.horagai.com/www/int/int003.htm> 二〇一五・一一・二四閲覧) 参照。

(8) 伊井自身による「年譜」(『さて重要でない一日』講談社文芸文庫版所収)、および『会社員とは何者か?』を参照。ただしこれらを読む限り、伊井の「フリーター」生活に対する認識が楽観的なものだったとは考えにくい。

(9) 仁井田典子「『フリーター』言説の発生とその変遷——研究の深化にむけた批判的検討」(『現代社会の構想と分析』六号、二〇〇八)、小熊英二編著『平成史(増補新版)』(河出書房新社・二〇一四)等を参照。一九九一年の労働省労働統計調査局編『労働白書』を紐解くと、一九八二年から九〇年にかけて「フリーアルバイター(フリーター)」の総数が急速に増加しているという報告が載っている。

(10) また、松本君が丸山さんに出した手紙における誤字をめぐる挿話は、文字の物質性とその視覚的な問題、という伊井の小説群に反復されるテーマ系に連なるものだが、これについては別の機会で仔細に論じたい。

(11) 『サラリーマン漫画の戦後史』(洋泉社・二〇一〇)参照。本書では浅田の『逃走論』において、コピーライター等の所謂

「ギョーカイ人」|| 「スキゾ人間」が肯定的に語られていたことが指摘されている。伊井自身、『会社員とは何者か?』の、黒井千次『働くということ』(講談社現代新書・一九八二)に触れた箇所、黒井の本の翌年に発表された浅田の『構造と力——記号論を超えて』(勁草書房・一九八三)以降、日本の「思想」の転換があったとしているが、ここでは同時に、労働に対する認識の変化が起きていたことも強く意識されている。

(12) 個々の作品に即した指摘として、清水良典「フェラチオ猿は進化の夢を見るか? (伊井直行「進化の時計」)」(『早稲田文学』第八次、一九九四・二)等があるが、何より、伊井自身の著作に、同名の小説を含む短編集『本当の名前を捜しつづける彫刻の話』(筑摩書房・一九九一)がある。

(13) これについては『会社員とは何者か?』一七三—一七九頁も参照。

(14) ちなみに、伊井の小説『お母さんの恋人』(講談社・二〇〇三)一六八頁にこれとかわめて似た記述がある。

(15) 『会社員小説をめぐって』(第十六回)、『群像』二〇一・一〇参照。引用箇所は『遠い国・遠い言葉』(小沢書店・一九七九)で坂上が自作(『優しい人々』)について書いた部分だが、この箇所は単行本化にあたり削除されている。

(16) 『さて重要でない一日』(講談社文芸文庫・二〇一一)一三頁

(17) 注(4)参照。

- (18) 小田の論や磯田光一『左翼がサヨクになるとき——ある時代の精神史』（講談社・一九八六）を踏まえた、仲俣暁生『文学・ポスト・ムラカミの日本文学』（朝日出版社・二〇〇二）等。たとえば内田隆三『国土論』（筑摩書房・二〇〇二）、原武史『レッドアローとスターハウス——もうひとつの戦後思想史』（新潮文庫・二〇一五）等の記述を参照。
- (20) 『物語としてのアパート』（彩流社・二〇〇八）参照。
- (21) 『都市のアレゴリー』（JINAX出版・一九九九）『都市と郊外の社会学』（若林他『郊外』と現代社会』青弓社・二〇〇〇所収）参照。引用は『都市のアレゴリー』一一二—一一三頁
- (22) イヴァン・イリイチ『シヤドウ・ワーク——生活のあり方を問う』（玉野井芳郎他訳、岩波現代文庫・二〇〇六）参照。
- (23) 笹野頼子は、伊井の小説におけるこのような特徴を「批評的テーマパーク」という言葉で説明している。「俺と彼の前のぶっ壊れた橋」（伊井直行『濁った激流にかかる橋』講談社文芸文庫・二〇〇七所収）参照。
- (24) 高井有一・菅野昭正・渡部直己『創作合評』（『群像』一九九一・三）参照。
- (25) この記述は伊井自身による解説（『会社員とは何者か？』一八〇—一八一頁）を参照している。

（かわさき しゅん・北海道大学大学院博士後期課程）